



社団法人

海外と文化を交流する会

(社) 海外と文化を交流する会会報

2004年3月発行(3月1回発行)

第22号

”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援 貧しい国々での医療活動を支援 各国大使館との協力などによる文化講演会の主催

事務局 〒151-0053 東京都渋谷区代々木 1-27-6 八ヶ丘ビル内 TEL&FAX 03-3370-7654

<http://www.kaigai-bunka.org> e-mail:jimukyoku@kaigai-bunka.org

## 巻頭詩

### スイセン

まど・みちお(詩人・児童文学者)

まど・みちお：明治42年山口県生まれ。台北工業卒。国際的な評価も高く、「アンデルセン賞」その他数多くの賞を受賞。著書に「ぞうさん」(ぞうさん ぞうさん お鼻が長いのね.....)や、「まど・みちお詩集」「宇宙のうた」ほか多数。動物に関する詩20編は美智子皇后が英訳するなど、話題になりました。掲載の詩は、作者の快諾を得て転載しています。

にわの くらやみから  
でんとうの下に かかえてきた  
スイセンの はちうえ

においまで  
ひかるようだ

かかえてきたことまで  
ひかるようだ

ここに ながれているのが  
いま わかった  
じかんの すいめん  
うつしだされて



## 35周年懸賞作文金賞発表

### 懸賞作文当選作決定

「地球村で生き残るために 日本に期待すること」というテーマで、海外からの留学生 から懸賞作文を募集しました。(社)海外と文化を交流する会創立35周年を記念してのプロジェクトで、北海道大学から九州大学まで日本全国の大学および大学院生から公募した結果、65作品が送られてきました。力作ぞろいでした。

当選作発表は、全国の新聞社に通知するほか、金賞については3月発行の海外と文化を交流する会会報に掲載、ホームページには銀賞もあわせて8作すべて掲載しています。

テーマ：「地球村で生き残るために これからの日本に期待すること」

今、地球村では60億人を超える人たちが生活しています。飢えや病気、貧困に苦しんでいる多くの人たちがいると同時に、いたずらに富を消費している人たちもいます。悲しい戦争も起きました。暴走しそうな宗教観や危険な思想がまかり通るようになりました。日本もだんだんおかしくなっています。一方で、私たちは、自然の美しさ、人と仲良くすることの幸せを知っています。国際社会における日本の役割の大切さも知っています。

このような状況の中で、日本は、日本人は、今、なにをしたら良いでしょうか。

君たちの新鮮な提言を待っています。

作文の長さ：自由にタイトルをつけて日本語4000字程度。

応募資格：日本の大学に在籍する3年生以上大学院生までの在日留学生。1名1編限り。

応募学生の状況：総数52名

出身母国：中国32名、韓国15名、タイ2名、ネパール1名、イラン1名、ミャンマー1名

男女比率：男性15名、女性37名

所属大学(応募者数順・北より・学校名のみ)：

5名=東京、京都、大阪、山口

4名=神戸、

3名=千葉、

2名=宇都宮、埼玉、東京工業、佛教、大阪産業、

1名=北海道、苫小牧駒沢星薬科、茨城キリスト、城西国際、

東京学芸、お茶の水女子、国土館、東京国際、山梨学院、金  
沢、北陸、同志社、立命館、追手門学院、関西、広島経済、九州

最終選考日：2004(平成16)年1月27日

最終選考委員：日野原重明(国際聖路加病院名誉院長)

轡田隆史(著述家・元朝日新聞論説委員)

松谷孝征（手塚プロダクション代表取締役社長）  
大谷俊介（電気通信大学レーザー研究所教授・当会常務理事）

当選作品

金賞 1 作（30 万円）：

「『わき目もふらず』は良いことか？」

郭蘊?（ギョウチン・中国・東京大学）

銀賞 7 作（各 10 万円・応募到着順）：

「食料を求めた戦争が起きるのか」 方海濤（ホカイウ・中国・関西大学）

「京都から見た日本」 金麗實（キムリョク・韓国・京都大学）

「日本、アジアへお帰りなさい」 李洋陽（リヤンヤン・中国・東京大学）

「東アジア共同体構築への貢献」 徐 陽（ジョウヨウ・中国・京都大学）

「あそこの彼ら」 金志英（キムジヨン・韓国・お茶の水大学）

「日本はある」 白貴順（ハクキジュン・韓国・宇都宮大学）

「第 2 の故郷・日本に対する感想」

ボインドグルン金花（ボインドグルンキカ・中国内モンゴル・千葉大学）

懸賞作文当選作金賞発表

金賞：「『わき目もふらず』は良いことか？」

郭蘊?（ギョウチン・中国・東京大学）

日本はここ数十年で、多くの有名な建築家を生み出しています。丹下健三や安藤忠雄はおそらく世界中の建築学生なら誰も知っている名前でしょう。近年、日本は不況にあり、日本の建築業界も元気をなくしていると言われていています。しかし、それでもこれほど世界で活躍する建築家を多く生み出している国は少なく、今でも世界から注目される国の一つであることは間違いないと思います。私はこの日本で建築を学んでいることにある種の誇りを持っています。

しかし、こうした日本の建築界の誇る質の高さの一方で、正直日本の街並みや都市の風景はあまりきれいだと言うことはできません。本来、建築と街を作ることとはともに空間を扱うという意味でかなり似ていて、共通することも多いと思うのですが、日本ではその両者に大きな隔たりがあると言えます。

その両者の違いをあげてみると、建築では一人のリーダー（建築家や時にはクライアント）の元で、一致団結して努力を重ねてゆき、きれいな作品に仕上げゆきます。途中でいろいろと予期しないトラブルも起こりますが、しかしそれは細かいところまで綿密に用意し努力をすることで、乗り越えてゆくことができます。この過程ではすべての行程が予定調和的であればある程よく、その方向性へ内へと向いています。

一方で、街を作るということは、短い期間でできることではなく、また他の人との話し合いを経ながら次第に形成されるものであり、そこには全体の展望と同時に他者との折り合いが必要となります。住民の意識という目に見ることのできないかたちで大衆も参加しています。こ

の行程では常に自分の外側へと目を向けていなければなりません。建築の過程を内向的と表現するならば、この過程は外向的という言葉で表現することができるでしょう。

建築のように一つの目標に向かって努力することを必要とされる分野、内向的なプロセスでは多くの日本人が活躍しているにもかかわらず、街づくりのような目標そのものの設定を必要とされる分野、外向的なプロセスであまり良い結果が残せていないのは、日本の置かれている状況や傾向とも強い関係があるように思えます。

こうした傾向は日本では多くの街で見ることができます。例えば、現在新橋の汐留地区では大きなビルがいくつも建ちはじめています。それらの一つ一つは、ガラスで包まれたきれいな形をしていたり、繊細で優雅な建物が多いのですが、それらをもう少し離れたところから見ると、それぞれがバラバラな形態、材料、色彩であり、一つの地区、街としての一体感は全くありません。良くも悪くもこの地区は現在の日本の街づくりと建築の置かれている状況を端的に表しているということができそうです。

「他の人たちよりもお金は持っているけど幸せではない。」

これはとある私の友人の言葉です。彼女は40代の会社員で、ある有名電機メーカーに勤めています。結婚はせず、自分の趣味のために仕事以外の多くの時間とお金を費やしています。彼女は20代30代に仕事が忙しく、それも結婚していない理由の一つのようです。

お金を持っていることと幸せであることは同じではない。このことは知識として知ってはいましたが、実際にそのような人と出会ったことは驚きでした。

彼女はこれまで本当に一生懸命に働いてきました。その報酬として他の人よりも多くのお給料を貰い、当時はそのことに非常に満足していました。自分が行った仕事に対する報酬としての給料という基準で、彼女は満たされていたからです。しかし、次第に周りの人も仕事の経験を重ね、同じように多くのお給料を貰うようになると、「他の人よりも多いお給料」という価値基準が彼女を満たすものではなくなっていました。さらにまわりの人たちには、彼らがこれまで築いてきた家庭や趣味といった仕事以外の価値がありました。彼女がそれに気が付いた時には今からそれらを手にいれる時間は限られていました。「ひたむきであること」「わき目もふらずがんばること」。こうしたある種の内向性が美德とされる日本で、「一生懸命であること」がはたして常に良いことであるのか。彼女と会っていると、常にそういうことを尋ねられている気がします。

先に述べた日本における建築と都市の質の違い、人生の途中で立ち止まって自分の価値観を見失ってしまった女性、これらは日本という社会全体にとってはそれぞれ固有の特殊な事情であり、今の日本が抱えている問題点とはそれほど関係がないようにも思えます。しかし、これらすべてに共通するのは、内向的・内省的であり過ぎることのバランスの悪さであり、外向的な視点の必要性です。上に挙げた例は個人的なことですが、組織や社会にとってこうした外向的視野の欠如はもっと大きな問題の原因ともなります。

現在の日本は、誰もが言うように大きな目標を失っています。航路を見失った船のように、それが社会全体の元気の無さや喪失感と結びついています。

このような時に、内だけでなく外を見ることによってのみもたらされる社会全体の目標や指針は日本全体の活力の源となり、それが結果として周りにも良い影響を与えたいと思います。

郭蘊? 自己紹介

4年前の10月3日、私は成田空港のきれいな到着ロビーに大きな荷物を抱えて立っていました。少しの緊張と多くの期待を胸にこの日本へとやって来たのです。はじめの1年は、浅草にある日本語学校へ通いました。そこでは日本語を学ぶだけでなく浅草にある多くの日本的なものと触れあうことができました。その後、東京大学に入学し、建築を学びました。それまで、浅草の下町の人々だけが私の知っている日本人でしたが、東京大学にはそれとはまた違うタイプの人々が集まっていました。いろいろな人々と出会えることが私の留学の最大の収穫だと考えています。(現在、日建設計勤務)

銀賞の7作は、割愛しました。お読みにになりたい方は、海外と文化を交流する会ホームページ <http://www.kaigai-bunka.org> をご覧ください。

## 海外からの留学生奨励金決定

### 留学生奨励金は6名に

「海外と文化を交流する会」の活動の一つとして、日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援があります。毎年3～5名を支援しています。会員の皆様からの紹介と推薦を受けて、選考いたします。ことしも支援したい留学生を推薦いただきました。作文、面接などを経て6名の方々に奨励金を差し上げることに決まりました。

継続者(共に3回目): ポインドグルン金花(モンゴル出身・千葉大学)、  
劉志興(LOW CHEE SING・マレーシア出身・立教大学観光学部観光学科)  
新規者: 金恩晶(KIM EUN JUNG・韓国出身・東京経済大学)  
田 蕾(TIAN LEI・中国出身・早稲田大学)  
丁顔冰(DING YAN BING・中国出身・東洋大学)  
ジェフ・ワマ(Jeffery Wama Gepul・パプアニューギニア出身・  
立命館アジア太平洋大学)

### 奨励留学生の作文

無 題 劉 志興さん

昨年も貴会より奨学金をいただきまして、誠にありがとうございました。留学生の私にとっ

ては、経済的にも学業上においても本当に助けいただき、心から感謝いたしております。今年の4月からは経営や財務会計分析ゼミ演習を参加し始まった。そこで、日本の外国人旅行者受け入れ数国際ランキングはなぜ35位の低水準でとどまっているか、この問題についてよく考えています。

2002年度に日本を訪れた外国人観光客はわずか524万人である。それに対して、海外を訪れた日本人は1652万人と統計された。インバウンドの内訳から見ると、アジア諸国からの観光旅行者は3分の2を占めている。その中、中国、台湾、韓国、香港は全体の50%ぐらいを占めている。そのため、日本に対して、アジアのインバウンド観光市場は非常に大きい間違いが無いと思っている。

日本の魅力をアジア諸国にどのようにアピールするか、日本政府はこの重要な役割を果たすことができると思う。小泉潤一郎総理大臣は2010年までに外国人観光旅行者を1000万人までをよんでくるという宣言を打ち出していたが、それは事実上に不可能なことで、架空な話だけと思っている。なぜかというと、日本政府は海外観光宣伝でわずかな予算しか使わないで、2001年度を例にしてみると、年間は38.3億円しか支出しなかった。それに対して、シンガポールは151.2億円、香港は98.1億円、フランスは62億円、韓国は260.0億円で、みんなが膨大な予算を使って自国の魅力をアピールしていることが分かった。日本は従来的にアジアの技術や製造業強国であり、アジアの金融センターでもある。だから、日本政府は外国人観光客の誘致のほうに、あまりにも力を注いでいないと思っている。日本政府首脳陣は韓国や米国の首脳陣のようにテレビなどに出て、自らで自国の魅力をアピールして、その魅力を主要海外観光市場へ売り込むべきだ。日本政府は自分のイメージを一新するために、なるべく在外公館を通じて、日本の魅力(伝統文化など)を強く宣伝する必要があると思っている。シンガポールの面積は僅か東京都の3分の1なのに、なぜ外国人の観光旅行者の受け入れ数は日本よりも上回っているか、政府のよいイメージにも重要だ。最新の調査によると、シンガポール政府はアジア一番清廉潔白な政府であり、直接な原因ではないが、間接的にアジア諸国の人々に自国の魅力をアピールすることにもできると思う。シンガポール政府は今も努力が続き、コンベンション産業、ハブ空港、町の美化政策などを通じて、自国の魅力を直接的にアジアや全世界へアピールしている。

自分の最終的な考えは、日本の魅力をアジア諸国へアピールしたいなら、政府はこの重要な役割を付けている。外国人観光旅行者の受け入れと同時に、国際交流、親善と平和という役割を果たせることができると思っている。

#### 「すてきな世界にしよう」 丁 顔冰さん

中国と日本は歴史的に長い文化交流があり、似ているところが多い。だから私は日本に来たばかりの時、違和感をそんなに強く感じなかった。特に日本は中国と同じく、漢字があるので、最初日本語をあまりしゃべれなかった私は漢字を書くことで意思疎通することが多く、とても楽だと感じた。しかしだんだん日本語を勉強するにしたがって、日本語がそんなに簡単ではないと分かってきた。日本語と中国語では同じ漢字を使っても、ある場合には意味がぜんぜん違う。そのため私も日本語を間違っただけで使ったこともある。

共通の漢字でも表面的に同じでありながらその内容はかなり違うのだと理解した。

日本に来てから2年半の間に、私は知識を吸収するほか、いろいろな新しいことを経験した。特に今年「海外と文化を交流する会」の活動に2回参加して、生活が充実したと感じた。そして日本人の風俗習慣や、考え方や、行動パターンにだんだん馴染んできた。日本人に対するイメージも日本に来る前と全く変わった。日本は先進国だが、私が出合った日本人はやさしく、礼儀正しく、伝統的な考え方を守っている。しかし他方でよく若い日本人の友人から中国を誤解しているような質問を受けるので、日本の若い人たちは中国のことを十分理解していないと強く感じるようになった。中国と日本の交流はまだまだ足りない。

中国と日本は未長く仲良く付き合っていかなければならない隣国同士だ。仲良く付き合っただけのためにはまず自分の考えを持ちながら、共通点を見出すことだ。それによって親近感が生まれる。そして相違を受け入れられるようになる。

現在観光学を専門として勉強している私は将来中国の良さを日本又は世界諸国の人たちに紹介し、中国を好きになってもらいたい。人々の心が通じ合えば平和で、すてきな世界になるだろう。

### 人の瞳で自分が見える 田 蕾さん

学校で「どうすれば自分が見えるか？」と先生に聞かれた。「鏡で」、「湖で」、「ガラスの破片で」、とクラス・メイトたちが言い出した。「人の瞳で自分が見える」 教室の隅に座ったマレーシアの学生が小さい声で言った。この一言をきっかけに、私が自らの留学の目的を考えなおした。

もともと、自分自身のことしか考えなかったが、いい大学に入り、卒業して、いい会社に入社し、キャリア・ウーマンの生活を過ごすのは夢だった。しかし、早稲田大学で色々な国の人と接して、自分の考え方もだんだん変わってきた。自分の事だけに限らなく、社会的、更にグローバルな観点に立つのは大切だと思ふようになった。中国にいた時、中国の歴史や、伝統文化などを全然気づかなかったが、今、日本で留学をしているから、つい日本の事と比べて、母国の事に関心を持つようになってきた。

実際に経験したことがある。今年の八月一日から三日間、早慶の留学生と日本の学生と合わせて五十人ぐらいで伊豆に行った。私は今回の活動で、中日の青年間の交流の重さを深く感じた。考え方や、世界観など沢山の違いがあったが、今回の活動によって、お互いに理解することができた。更に相手の目で自分の国の事或いは自分の事を各角度から考えさせられ、とてもいい勉強になった。

政府間の友好交流の土台として、このような民間交流は最も有効だと思った。小さいことでは毎朝隣人に一言の挨拶するとか、日本人友達と食事をするとか、簡単そうに見えることが、実際に国際交流の面から見れば、一番大切な役割を果たすと思う。

要するに、国際交流のキーワードとして、共存という意識を自分の努力で、周りの人に持たせるのは基礎だ。とりあえず、今、自分が日常の小さなことからやっっていこうと思う様になった。

### 国際交流に関して 金 恩晶さん

近頃マスコミで「異文化コミュニケーション」という話がよく流れています。異文化コミュニケーションとは各国の人々がお互い自国の文化、習慣などの交流を通して相互の理解を深めることであります。言葉が通じなくても目や体で表現することができます。例えば、目と目や体の表現や動き、絵や音楽、料理や手芸などの伝達方法によりお互い理解をすることができます。

世界中で国境を越えて様々な交流を通しての相互理解はマスコミの中にあふれています。国際交流機関は UNESCO、ロータリークラブ、YMCA など数え切れない程ありますが、私は YWCA の母親運動にお世話になっています。YWCA には留学生に対しての母親運動や日本に不慣れな留学生のための相談室、談話室など日本で安心して生活できるような企画を実行しています。私は毎週一回開かれる談話室に参加し、各国から集まる留学生たちと国際交流異文化コミュニケーションを体験しています。そこで、中国人は目上の人に対する尊敬語を使わずに話をします。私はそれを聞いた時、韓国の習慣では考えられないことで本当に驚きました。アメリカ人はいつも笑顔で明るい話題で周りの雰囲気盛り立ててくれます。各国のお国柄が顔を出す楽しいひとときです。

前に述べたように例え言葉が通じなくても集まってきた他国の人々との交流は手振り、身振り、絵など示して心を通わせています。日本で体験をした数多くのことを、帰国後生かし、積極的に国際交流ボランティア活動に参加して自分のできる限り力を尽くしたいと思っています。

## エッセイ：国際関係（IR） ジェフリー ワマ ゲブルさん

国際関係（IR）は不確実な境界で広い分野である。それは学際的なもので、経済学、政治学、社会学及び他の関連の分野を含んでいるからである。本質的には、世界の国家間の関係にかかわるものである。国家間の政治的な関係は平和、戦争、外交、同盟や文化的な関わり等を含んでいる。社会的・文化的な関係は教育や文化交流的なものを含んでいる。そして、経済的な関わりはグローバル貿易交渉、関税や輸出入禁止のような問題を含む。国家は国益の追求のために、政策家のような専門家を介して、しばしば協力的ないし非協力的な行動を取って来ている。そのことが他の国々に友好的な行動であったりまた敵対的な行動になったりもし、またその反面、他からもされたりする。

国際関係の伝統的な焦点は戦争と平和という国際安全保障の小分野である。その中心的なものは軍の配備、条約と同盟の締結、軍隊の機能開発および配置等の類似した課題である。言えることは、戦争こそが国際関係の極度の結果である。但し、冷戦時代の終わりはまさに伝統的な戦争の手腕競争や核戦争の終結を意味した。他方では、その間にも新たな地域対立及び民族紛争などが勃発し、世界平和の継続的維持に一定の挑戦にもなっている。

グローバリゼーションの出現と拡大により、国際政治経済学が国際関係の別のサブフィールドとして現れた。今日において、グローバリゼーションが主要な力となり、国家間の経済的な国境が事実上分解される代わりに、国境なきハイテクな環境を作り出し、その特徴として自由に資産や資金が流入する。グローバリゼーションが到来し、そこにとどまる間、国家が直面している国家間の貿易談話も高まっている。その半面、発展途上国はグローバリゼーションに直面してより傷つきやすくなり、結果として貧富の差がさらに拡大するばかりである。



権力の均衡を取り、世界平和の積極的な促進そして国家間協力を実施することで結果として国際連合（UN）のような国際的な協力組織が設置された。米国のような個々の国家はまた平和を促進し、世界中に民主主義を広げるために大きな役割を果たしてきている。但し、米国のその努力を認める反面、全世界的なコミュニティの中では疑問視する声も上がっていることも事実である。最近のイラクの状況が今日起こっている出来事の証明そのものである。国連の役割は一般的に受諾されているが、イラクの米国による侵略の最近の一方的な行為は新しい先例を示すようになり、国連の役割を永久的に変えるかもしれない。21世紀はまた新しくグローバルな力を持つ中国のような国の出現も可能にした。その膨大な土地面積と急激な経済成長のおかげで、中国は世界の政治の中心になりつつある。歴史的に見れば、そのような力関係の転位により国際的なシステムで不安定をもたらすことになる。

絶えず変化する国際関係において、国家は常にテロリズムの脅威、地球温暖化、地球規模の貧困、地球規模の資源の窮乏、枯渇とグローバル化のような共通の課題に直面しており、平和とモラルの外交政策を促進するためには絶えず挑戦されている状態である。ここで明白なのは、個々の国家の存続がすべての国家の行為に依存しているということである。これは敵意よりもむしろ、国家間の協同を求めることである。主権が尊重され、外交政策が一国間の美徳より多国間主義の優位を取るべきである。同時に国家は慎重さを追及しなければならない。国家間が健全で平和的な関係の基礎を形作るために道徳、法律、非暴力や国際協力組織が立ち上がっている。結論としては、このわが惑星である地球及び人間そのものの救済こそがどの国家の国際関係（IR）にとって共通の目的であるべきではないであろうか。

## 会からの報告 & お知らせ & お願い

### つどい 「21世紀を語ろう」

有意義に話をしたい.....これからの日本の進むべき道を探ることを目的として始められたこの「つどい」は、2004年2月19日、東京・銀座の銀座教会で18:00～20:30に開かれました。軽食付きの会費は1,000円。談論風発のこの日、話しあったテーマは多岐にわたり、「日本人の石油消費は世界で一番効率いい使い方をしている」「カード支払いシステムは、小売商にとってたいへん大きなマイナス面がある。預金のない人が利用するから」「大企業の利益は、必ずしも地元の利益になっていない」「企業の利益主義が失業・リストラと直結している」「精神的なものとして.....“義”に対する認識が薄くなってきている。とくに若者には“大義”は理解されていない」などさまざまでした。

次の開催は未定。

### つどい 「留学生との交流」開かれる 顕彰作文授与式とのドッキング

会員の希望にこたえ、当会が支援している留学生を中心に交流の機会を持ち、相互理解を深める「つどい」を行っています。今回は2004年3月27日、東京・麹町のレストラン「る・びあの」で開かれました。35周年記念懸賞作文当選者顕彰授与式とドッキングして実施したものです。

詳細は、次号でお知らせします。

次回は夏に予定しています。場所・日時は決まり次第、お知らせします。お問い合わせは、事務局までFAXかe-mailでどうぞ。ホームページでも発表します。

## 寄付をいただきました

次の方々から当会へ寄付をいただきました。ありがとうございました。有意義に遣わせていただきます。

轡田隆史さん  
松谷孝征さん  
小平祚愛さん

## 秋のコンサートはバイオリンの川畠正道さんに決定

2004年秋のチャリティコンサートは、バイオリニストの川畠正道さんに出演をお願いし、快諾をいただきました。欧米マスコミに「気絶しそうに美しい音色」と評される、世界的なバイオリン奏者です。ほかの出演は東京ハルモニア室内オーケストラ、飯靖子（チェンバロ）の総勢11名。

場所は東京・渋谷の「青山学院ガウチャー記念礼拝堂」の予定。日時は11月になるでしょう。

会費は4,500円（前売り4,000円）です。お問い合わせは海外と文化を交流する会のファクス03-3370-7654またはE-mail:jimukyoku@kaigai-bunka.orgまで。

## ギッシュさんの本

海外と文化を交流する会常務理事・青山学院大学名誉教授のジョージ・ギッシュさんが著作を出しました。たいへんにユニークでおもしろいものです。以下、版元の担当者からの紹介です。

「ワンダフル デイファレンス」 ジョージ・ギッシュ・著

定価 1,995 円（税込） 学研

\* \* \* \*

ワンダフルデイファレンス、ワンダフルワールド。「違い」がわかると人間は面白い、「違い」があるから世界は素晴らしい！

\* \* \* \*

バナナは日本語？ ニンテンドーは英語？ どうして英語では、苗字より名前が先なの？ 日本人の妻を持ち、日本語教師、青山学院大学教授、琵琶の研究者として、四十数年間にわたり日本に暮らす著者が、結婚から子供のしつけの問題まで、日米文化の違い、変容する日本文化について語りかける。そこに、文化の壁を越えて、これから の時代に求められる日本人像が見えてくる。

\* \* \* \*

『日本人って、日本ってなに？ そのヒントがここにある。それは日本人が胸を張れるようになるヒントでもある。』（東儀秀樹氏絶賛！）

## 留学生へのプレゼントを……

余っている図書券、金券など、留学生にプレゼントしたいと思っています。事務局まで お送りくださればたいへんうれしく存じます。

## 会費納入のお願い

2003 年度の年会費納入をお願い申し上げます。2002 年度の年会費未納の方は、ぜひともご納入ください。高く評価されている当会の活動は、皆さまのご支援あってこそなのです。

郵便振替 00130-2-366249 社団法人海外と文化を交流する会

銀行振込 東京三菱銀行渋谷支店 (普) 2266599 海外と文化を交流する会

会費 10,000 円 (正会員) 5,000 円 (特別賛助会員) 3,000 円 (学生会員)

海外と文化を交流する会事務局

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パイビル内

TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail:[jimukyoku@kaigai-bunka.org](mailto:jimukyoku@kaigai-bunka.org)